

花

靖



© Yasushi Inoue. 1977

紅花

昭和五十二年一月三十日 第一刷

著 者 井 上 靖

発 行 者 檜 原 雅 春

発 行 所 株式 文 藝 春 秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三
電話 (〇三) 二六五—二二一

本文印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《長篇小說》

紅 花

內容目次

早春	訪問者	車窓	落葉	空港	秋の雨	街	夏の終り
219	192	165	125	85	61	27	7

解説

福田宏年

293

終幕

279

声

258

紅 花

装
幀

平山郁夫

夏の終り

亜津子は七時に眼覚めた。ゆうべ遅く着いて、どのような旅館か全く見当がついていないので、すぐ縁側に出てみた。から松の幹が二十本程立っていて、その間を朝霧が立てこめている。霧が深いので見通しは全然きかず、から松の樹幹が、あるものははつきりと、あるものは薄ぼんやりと見えているだけである。霧の中に、まだどれだけの立木がかくされているか判らない。

静かそうな旅館だと思った。夏の終りの三日間を過すためにやって来ていたので、肝心の旅館がばつとしなかったら、すぐにも替ってしまふつもりだったが、どうやら、これならその心配はなさそうである。霧が晴れてみなければ

判らないが、庭もかなり広そうだし、立木のたたずまいも閑寂である。それに朝霧の立てこめるのも、またいいと思う。

縁側には硝子戸^{ガラス}がはめられてある。雨戸もあるが、それは平生使っていないらしく、硝子戸に錠がかかっている。亜津子は錠を外して、硝子戸を一枚開けてみた。朝の空気は思っていたより冷たかった。タオルの寝衣^{パジャマ}では、すぐ風邪をひいてしまいそうである。

亜津子は戸を閉めて、縁側の籐椅子に腰を降ろした。庭の方に人の姿でも見えたら、すぐ部屋へはいるつもりで、多少用心しているが、家の内部がしんとしているとところから推すと、まだ誰も起きていないのかも知れない。

亜津子は寝衣の襟を手で押えながら、庭へ視線を投げていた。鳥の声が聞こえている。それも一羽や二羽の鳴き声ではない。やたらに沢山の鳥がむらがって鳴き立てている感じである。亜津子にはなんとという鳥か見当がつかない。霧のために姿は見えず、どこからともなく、声だけが聞こえている。硝子戸を開けた時は、この鳴き声に気付かなかったのだから、籐椅子に腰を降ろしてから、鳥は鳴き始めたのであろう。

五分程ぼんやりしている間に、霧は薄紙でもはがすように次第に薄くなり、木立の輪廓がだんだんはつきりして来

た。やがて二百坪程の青い苔に敷きつめられた庭の全景が眼にはいつて来た。木は殆どから松である。旅館の建物は鉤の手に作られていて、右手の方に、亜津子の居る部屋と同じ作りの部屋が三つ並んで見えている。最近できた夏場の旅館らしい簡単な作りだが、庭の方は建物に不似合な程立派である。何年も手入れされて来た庭だけの持つ古さと落ち着きを持っている。以前は別荘の庭でもあったのであろう。

向う側の部屋の硝子戸を覆っているカーテンが引かれ始めると、同時に亜津子は部屋へ退散し、寝具を片付けて貰うために、床の間に置いてある受話器を取り上げた。

亜津子は青い苔を敷きつめた庭に眼を当てながら、朝食の箸をとった。五十年配の女中が給仕に出ている。

「この夏は東京は例年になく暑かったようですが、ここに居たお蔭で助かりました」

おたきさんは言った。料理を運んで来た時、若い女中が彼女のことをそう呼んでいたで、それが彼女の名前であることを、亜津子は知っていた。

「夏だけここに來ていらっしゃるの？」

亜津子が訊くと、

「この年齢になって旅館勤めは厭なんです、ここのお内儀さんが、夏だけ避暑のつもりで軽井沢の方を手伝ってく

れないかということ、初めてこうした勤めに出てみました。忙しいことは忙しいし、気疲れのすることもあります。お蔭で東京の今年の暑さだけは知らないで過しました」

「それはよかったですね。東京の今年の暑さと言ったら――、凄（し）げやすくなつたのは、ほんのこの二、三日でしょう。夏だけと言っても、いつまでいますの？」

「ここは九月いっぱいまで閉めます。一年中開けておいても、結構商売にはなると思いますが、お内儀さんにはその気がないようです。東京の店とここでは、それは大変ですわ。女手一つでは、なかなかね」

「御主人は？」

「お内儀さん、ひとり者なんです」

「それは大変ね」

「わたしもひとりなんです。主人を戦争で失いましたね。大体、旅館とか料理屋で働いている女のひとには、ひとり者が多いんです。ひとり者でないと、こうした勤めはできません。夜は遅くなりますし、朝は早くなります。家を持っていたら、到底できません。それに、旅館の方ではなるべくなら住み込みを希望しますし」

それから、おたきさんは、

「失礼します」

と言って、袂（たもと）からピースの箱を取り出すと、それから一

本抜き取って、火を点けた。その煙草の喫み方にも、素人とはどこか違った着物の着こなしにも、こうした場所の勤めは初めてであると口では言っているが、必ずしもそうではなさそうに見えた。夫を戦争で失ったのは事実であろうし、それから今日までの二十年近い歳月を生き抜くことは容易なことではなかったであろうと思われる。すると、

「わたしもそうですけど、こうしたところで働いている女のひとは、みんな不幸ですよ」

「そうでしょうか。そうは見えませんが」

「不幸ですね。女というのはやっぱり家庭を持っていないといけませんわ。何となく生活が地についていない気持です。いまここに女中さんが七人居ますが、この土地で臨時に雇った三人の娘さんをのぞくと、みんな主人と生き別れか死に別れかしています」

「子供さんは？」

「持っている人も、持っていない人もあります。子供というものは、持っていれば持っているで、持っていないければ持っていないで、厄介なものです」

おたきさんは言った。そして、

「奥さまはお子さんは？」

と訊いた。

「やはり、奥さんに見えます？」

亜津子は訊き返した。

「そりゃあ、——お若いですけど、やはり娘さんにはない落ち着きがございます」

「もう娘さんでは通りませんのね。自分では娘のようなつもりでいるんですけど」

「二十七？ ごめんなさい、ぶしつけにこんなことを伺いまして」

おたきさんは亜津子に眼を当てたままと言った。

「二十八ですよ。一つ若く言って下さって、有難う」

亜津子は笑いながら言って、

「子供はありません。それに、わたくしもあなたと同じようにひとり者ですよ」

「まあ」

おたきさんはちよつと驚いて見せて、

「ほんとうですか」

と、あいまいな言い方をした。

「ほんとうですとも。——わたくしも、こうしたところで働いてみましようか」

「御冗談ばかり」

「いいえ、半分は本気ですよ。これから長い間、ひとりでやって行かなければなりません」

「どうして？ また」

亜津子が少しもかくし立てしないので、却っておたきさんの方がたじなな恰好だった。

「わたくしも、二年前に主人を亡くしましたの。結婚して二年程で」

「まあ」

「こうしていると、のんきそうでしょう。でも、そんなのんきではありませんのよ。子供でもあるといいんですけど」

「まだ、お若いんですし、お子さまがないというんでしたら」

「でも、再婚する気持はありませんわ」

ぴしりと亜津子は言った。

「それは、まだそういうお気持にはなれないでしょうね。でも、お若くて、お子さまがいないでしたら、やはり、いつかはお家を持たれた方がいいんじゃないでしょうかね。変なこと申し上げて、大変失礼なんですけど、女がひとり生きて行くことは容易ではございません。たとえ、お金にはお困りにならなくても」

「お金に困らないわけではありませんのよ。やはり働かなくては。——でも、もう結婚する気にはなれませんの。もう、一回結婚したんですから、これからあととはひとりで生きさせて貰いますわ」

それから、亜津子は卓の上のものを片付けて貰うために、少し改まって、御馳走さまと言った。

「何もございませんでした」

おたきさんの方も、女中の立場に返って、

「今日は、どちらかへいらっしゃいます？」

「ええ、どこか近くを歩いてみましょう。二、三日休むつもりで来ましたの。こう言うと、わたくし、結構な身分に見えるでしょう」

亜津子は笑いながら言うのと、立ち上がって、縁側へ出た。朝の弱い陽が青い苔に当たっている。

亜津子は近くを散歩してると言って、宿を出た。玄関の正面に掛かっている時計を見ると、九時を少し廻っている。東京に居ると、朝食の後片付けに追い廻されている時である。銀座の店の方からも、そろそろ電話がかかり出す。忙しい一日が始まろうとする時刻である。お蔭で今日は、そうしたいっさいのことから解放されている。

亜津子は旅館の前を、木立の茂みの多い右手の方へ歩いて行った。道の両側にはたっぷりと敷地をとった別荘が並んでいる。どの家の庭にもから松が多い。亜津子は一軒一軒、木立越しにそれらの建物に眼を当てて行く。持主の好みを出しているのか、それぞれ思い思いの恰好を見せてい

る。明治の洋館とでも言いたい。頗る古風な建物であれば、最近よく見かけるベランダを思いきって大きくとった明るい建物もある。純日本式の家もあるが、この方は大体において古びていて、暗そうである。

亜津子は一軒一軒見て歩いて行くうちに、すでに引き上げてしまったのか、人の住んでいる気配のない家の多いことに気付いた。そう思ってみると、大掃除をしている家や自動車へ荷物を運びこんだりしている家も眼についた。いかにも夏が急速に終りつつある感じである。

亮一はさえずくならないで、自分の結婚生活が順調に続いていた、あるいは自分たちも、このような場所に夏だけを過す家を持つようになったかも知れないと思う。亮一は仕事忙しいので、なかなか軽井沢へなど出かけて来る暇はなかっただろう。併し、自分だけはひと夏をここで過してもいい。そして毎日毎日日本を読む。本を読むのにはベランダがいい。土曜から日曜へかけて亮一もやって来るだろう。亮一は自動車で来るに違いないから車庫も必要だし、らくに自動車がいれるように、門から玄関までの道はかなり広くとおかなければならない。店の者も、たまには連れて来なければならぬので、そのために、できれば別棟の建物が欲しい。寮とまでは行かなくても、寮風の建物があったら、どんなにいいだろう。

亜津子はそんなことを考えながら歩いて行ったが、途中で、そうした過去と現実が入りまじった夢のような想念からきびしい現実に戻った。亮一は亡くなっているのであるし、現在の自分はひと夏を軽井沢で過すような結構な身分ではないのである。僅か三日間ひとり過すためにも、周囲に気兼ねしたり、仕事のやりくりしたり、容易なことではない。

そのうちに亜津子はふと足を停めた。戸締りされた一軒の別荘の庭先に秋の花の咲いているのが美しく見えた。誰も見る人のない庭に咲いている紅紫の花が、そのあわれさが、亜津子の心にしみた。

萩の花を見るのはずいぶん久しぶりのことである。古びた色紙の小さいけれども振りまいたような、その花のそんな花らしからぬところが好きである。色も形も、遠くから見る限りに於てはぼんやりしている。

結婚した年の秋、亮一の郷里である水戸へ行った。十月の終りで偕楽園では萩が盛りであった。大きな萩の株が幾つとなく並んでいて、それぞれが花をいっぱいつけていた。咲きこぼれているといった感じであった。それと同じ花が、いまここでも咲いているのである。

亜津子は暫く立ち停まって、庭先の萩の花に眼をやっていた。ここの別荘もすでに人の住む気配はなかった。建物

の窓という窓は全部閉ざされており、庭は廢園といった感じになっている。どこが荒れているというわけではないが、人が住んでいないというだけのこと、庭は廢園といった感じを持って来るのであろう。

こうしたことは人が住む家でも同じことかも知れない。主人の居ない家は、主人が健在である家とは、どこか違って見えるに違いない。この庭のように、自分の家なども、第三者の眼には、やはり廢園的なものとして映っているかも知れないのである。

亜津子は歩き出した。そして、——もし亮一が生きていたら、と次の思念の中へはいつて行こうとして、危うく気がついて、そこで踏みとどまった。もう亮一のことを考えてはいけない、なぜ亮一が生きていたらといったような、仮定的な考えにはいつて行こうとするのであろう。亮一が亡くなって、もう二年経っているのである。亮一が生きている時は、決して亮一をまん中に据えた考え方はしなかった。むしろ亮一は向うへ押しやって、自分中心の考え方をしていた筈である。

——若し亮一と結婚しないで、ほかの人と結婚していたら。

何度こうした思いを持ったことであらう。亮一のような商売人と結婚しないで、芸術家と結婚していたら？ 学者

と結婚していたら？ ひと前でお金のことなど口にしな人と結婚していたら？ 見合結婚でなくて、ほんとうに身も心も捧げた好きな人と結婚していたら？

それなのに、現在は、いかなることを考える場合でも、例外なく、若し亮一が生きていたらといった仮定と結びついてしまう。人間というものは変なものである。もうこうした考え方をしてはいけない。そもそも自分がこの短い旅に出ることを思い立ったのも、またその思いを実行に移したのも、こうした考え方を捨てるためではなかったか。

実際に亜津子がこの旅に出たのは、未亡人であるとはいえず、まだ充分に若いと言える自分の、これからの生き方について考えてみるためであったのである。

亜津子は亮一の亡くなったあと、何ということなしに家の中心に坐ってしまった恰好であった。亮一の生きている間は、亜津子の立場は嫁であり、それ以外の何ものでもなかったが、亮一の亡き後は、どういうものか、亜津子が亮一に替って、家の中心に居坐ってしまった。これは亜津子が自分から望んでやったわけではなかった。亜津子にしてみると、結婚生活と言っても僅か二年のことであり、夫に亡くなられたいまは、普通なら婚家先から籍を脱いて、実家へ帰るのが通例であった。子供でもあれば、そうも行

かないが、亜津子の場合、子供はなかったし、まだ三十歳には二年程の間があった。実家の方でもまだ両親は健在であり、亜津子が出戻り娘になったとしても、どこからも文句の出る筋合いにはなかった。

——機会を見て帰って来るんだね。

これが父の考えでもあり、またいまは別に家を持っている兄の考え方でもあった。兄の方は、

——あまり腰を落ち着けていると、いろいろな関係ができて、籍を脱けなくなるかも知れない。まあ、いい加減に潮時を見て、さっと引き上げて来るんだね。

会う度にそんなことを言った。

——これが生活に困る家というなら、そう邪慳にもできないということもあるが、こちらよりよほどブルジョアなんだからね。

全く兄の言う通りであった。亜津子の実家に較べれば、婚家先の方が経済的にはずっとゆとりがあった。実家の方は、父は開業医であり、兄は商社会社の中堅社員であった。婚家先の方は、銀座でも多少名前を知られた洋品店を持っていた。亮一の父の始めた仕事であって、亮一は大学を出ると、父の後を継いで商売人になるのを厭がっていたが、父の没後、否応なしに、その仕事に引き入れられてしまったらしかった。初めは嫌っていたものの、いざその仕事に

はいつてみると、大きく金のはいることもあって、そんなことから満更でもなくなったようだった。亜津子が嫁いだのは、亮一が仕事に身を入れ出した頃であった。

亮一は頑健な体をしていたが、急な狭心症の発作で亡くなった。亮一の祖父に当る人も、亮一と同じ年齢で、やはり同じ病気で亡くなったというから、血統的に、そうした心臓の脆さを持っていたのかも知れない。

亮一の亡くなった後には、五十歳の母のしげと、亮一の弟の佐久二が残された。佐久二は大学を出て、現在東洋史の研究室に居るが、親戚の間では、末の見込みがあるかどうか判らない大学の研究室になど居るより、亡き兄に代って、銀座の店を経営して行くべきだという声が起っている。勿論母のしげもそれを希望しているが、まだ口に出して言ったことはない。

亜津子は亮一亡き後も、曲りなりにも商売を続けて来ている。五人の店員を使っているが、多少その顔触れが亮一の時より変っている。亮一の時は男店員が三人、女店員が二人だったが、いまは男店員一人を残して、あとは全部女店員に替えてしまっている。女店員は使えるが、男店員は使いこなせないで、人員の入れ替えをしたわけである。残っている男店員は正直で律義な五十年配の人物で、どんなことを任せても信用できた。

亜津子は店主だったが、実際の商売は斎田というこの人物がやっていた、この斎田卓平が居なかったら、いまのところ店はその日からやって行けなかった。亜津子は斎田に思いきって高給を払っていた。斎田は斎田で、そんな女店主に感謝し、現在の立場に充分満足していた。自分が居なければといった、そんな態度はおくびにも出さなかった。

亜津子は、自分が若し仕事をやって行く気なら、何年かのうちには仕事の大部分を覚えてしまい、結構店の采配をふるうことはできると思っている。勿論、男でないことやりにくい面もあったが、併し、女は女で、却って得な面もあれば、仕事がやりよい面もあった。

——奥さんが男に生れていたら大変なものですよ。亡くなった御主人など足許にも及びませんな。

斎田は時にそんなことを言うことがあった。満更お世辞ではないらしかった。確かに亜津子にはそんな面があった。自分で仕事に関係してみて初めて判ったことだったが、これは売れるとか、これは売れないとか、そうしたことはかんがあった。医者娘に生れて、商売とは無縁に育てられたが、亜津子は夫に亡くなられて、初めて自分のそうしたところを発見した。

亜津子は、父や兄が言うように、潮時を見て引き上げないと、自分がほんとうに洋品店の店主として一生を送って

しまいかねないと思った。仕事が少しでもうまく行った時など、亭主など居なくても、一生独身の女店主として、充分たのしく、賑やかにやって行けそうな自分を感じた。

亮一が亡くなつてから、亜津子が替って仕事をやって行き、いっこうに店を潰すことも縮小することもないのを見て、母のしげは自然に亜津子に対する態度を変えて行つた。亮一の生きている時は、しげは亜津子に対して、かなり邪慳なところも意地悪なところもあったが、そうした面を、しげは次第に引込めて行つた。

しげは、現在は亜津子に対していい姑であった。何事に依らず、二言目には、亜津子、亜津子と嫁の名を呼んだ。どんな些細なことでも、亜津子をさしおいて、独断でやることはなかった。そうしたところは、なかなか聡明な女であった。

亜津子がこんど軽井沢の旅を思い立つたのは、東京の夏がひどく暑くて、ひと夏ですっかり痩せてしまい、斎田にすめられて、無理に休養をとらせられたような恰好だったが、併し、それ許りではなかった。亜津子は鏡に對つて、自分の瘦せたことに氣付いた時、いつまでもこんなことをしていいのかという、自分自身に対する^{かん}労りの思いに取り憑かれたのであった。考えてみれば、一日一日安閑と